

女体化上杉君が天涯孤独  
になって中野家に預  
けられる話

悠魔

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

家庭教師として働いていた上杉風波は、中野丸男から父親と妹が交通事故に遭ったという連絡を受ける。

急いで病院に向かうものの、二人の意識が回復する事はなく――

※上杉勇也とらいはが死にます。

※女体化主人公です。

※メンタルも弱くなっています。

※時系列は二回目のテストの一週間前からスタート、二乃が髪を切る直前です。

# 目次

十話	九話	八話	七話	六話	五話	四話	三話	二話	一話
55	46	39	34	26	20	15	10	5	1



## 一話

「ーきっかけは、あの電話からだった。

私が中野家の家庭教師になってから二回目の試験勉強に備えていた時。二乃と三玖のチャンネル争いを止めていた時に、不意にその電話がかかってきた。といつても私は携帯を普段見ないから、五月の携帯に着信があつたのを渡されただけだけど。

電話先の相手は、この子達の父親だつた。

以前電話した時も試験が間近に迫っている時期だつた。察するに、今回もまた赤点を取ればクビ、そんな条件をつけられるのだろうと身構えていた。

しかし、電話越しではあつたがーその声に冷徹さはなく、むしろ声が震えるのを必死に抑えたかのようなー切迫した焦りが否応にも伝わってきた。

『ー上杉君、落ち着いて聞いてほしい。君の父親と妹さんが交通事故に遭つて、意識不明の重体になっている。今さつき私の病院に運び込まれてきたところだ。医者として最善は尽くすが、万が一もあり得る。家庭教師の仕事は今日は休んで、今から言う病院に来て欲しいー住所はー』

次から次へと流れてくるシヨツキングな情報に混乱したが、身体の方は反射的に動いていたらしく、ノートに言われた住所を走り書きするとそのページを破いた。

頭の中では「万が一もあり得る」という言葉が何度も復唱されていた。死への実感。母親を喪くした私には、その恐怖がより鮮明なものになってやってくる。

きつと酷い顔をしていたのだろう。ふと顔を上げると、私以外の全員が不安そうな顔を浮かべていた。あの二乃までもが、心配そうに見てくるではないか。

そこで漸く私の頭は冷える。この子達を心配させてどうする？きつと大丈夫だ、まさかウチに限ってそんな事が起こる筈がない——そう自分に言い聞かせると、余計なことを考えないように大きく息を吐き出した。

「——ちよつとウチの家族が事故つたみたいで、私は様子を見に行かなくちゃいけないから——悪いけどあとは自習で——」

「——上杉、——」

「——私、行くから。きつと、絶対、大丈夫だから——すぐ戻ってくるから——」

我ながら要領を得ない説明だと思う。

しかし同時に、今の私に具体的に話せる余裕はなかった。

命にかかわるかもしれないという事は言わなかった。言ったら、それが現実になってしまうような気がした。

破ったノートの切れ端を片手に部屋を出る。背中に自分を呼ぶ声があったが、それすらも煩わしいと感じる。エレベーターを待つ時間がやけに長く、実際三十階建てなのだから長くて当然なのだが、何時間も待ったような気がした。

病院に行くまでの事は、あまりよく覚えていない。父親やらいはがいなくなってしまうかもしれない。そんな恐怖が浮かんでは消えた。その恐怖から逃れるように、ただひたすら走った。

「どれだけ焦っていたのか。」

私は病院に入るやいなや、受付の人に噛み付いていた。

「こんにちは、本日の御用はー」

「っ、らいはとお父さんが、家族が交通事故に遭ったって聞いて」

「……！あなたのお名前を伺ってもいいですか？」

「私は上杉風波かぜはです！二人は、二人は無事なんですか」

「ええ、きつと大丈夫ですよー少々お待ちください」

受付の人に案内されて、手術室の前まで連れてこられた。ランプが点灯しているのを見るに、まだ手術は終わっていないらしい。それを見て、まだ予断を許さぬ状況だという事実<sup>じじつ</sup>に苦しんだ自分と、ひとまず安堵した自分がいることに気が付いた。

「ー二人はまだ生きているのだ。」

そのランプが早く消えてほしいような、永遠に点いてほしいような矛盾した感情が混在していた。もしランプが消えた時、二人の命のどちらかでも無くなってしまうていたとしたら――耐えられる自信は、なかった。

永遠とも思える時間の中、自問自答の海の中で溺れていた。もし死んでしまったらどうしよう。いや、そんなはずは無い――その繰り返しを、無限に。だからランプが消えた時、私にとつてそれは、まるで眠りから覚めたかのような感覚だった。

「らいはと、お父さんは――？」

医者と思しき白衣の男の疲労の影は、恐ろしいまでに濃かった。眼鏡の奥の表情は、年齢以上に弱り切っていてみえた。

「――――最善は尽くしましたが――残念です」  
その言葉が重くのしかかった。



## 二話

「ぐず……ひつく、う、うう、うあああああん」

泣いた。

みっともなく泣いた。

涙は尽きない。涙が乾けばそれ以上に泣いた。

二人の距離が遠すぎることに、涙が止まらない。

身体はここにあるのに、もう二度と帰ってはこない。手の冷たさが、どうしようもないほどの、大きな隔たりが存在していた。

国語の読み取り問題で読んだ小説でも『死』を扱っていたけれども……あれは、物語を動かす舞台装置であつたのだなと感じる。

死んだところで何を得る訳でもない。

ただ、ただ、悲しいだけ。

「お、父さん………らしいは………」

どれくらい泣いただろう。人は泣くと頭が痛くなるらしいけれども、それよりも心が痛い。……涙と鼻水で汚れた顔は、人前に晒せるような物ではなかつたろう。

しかしそれが何だというのか？  
死ぬよりはマシだ。

▽▽▽▽▽▽

二人の葬儀はとんとん拍子に進んだ。  
実際には祖父母が裏で尽力してくれていたのだろうが、私にとってその時間はあつと  
いう間に過ぎていったように思えた。

人が死んでも時間は進む。二人と共に過ごした日々は、既に過去のものだと、世界に  
無理矢理認識させられたかのようだった。

この世に神がいるとしたら、きつとそいつは気まぐれなのだ。だからこんな酷い仕打  
ちも平然とできるし、運命に翻弄される人間を見て面白がっているに違いない。そう  
確信できる。

「風波——頑張ったなあ、辛かったなあ」

「辛い時は、泣いていいんですからね」

お爺ちゃんとお婆ちゃんの言葉を、どこか遠くに感じていた。そうやって慰めてくれ  
るのは嬉しいけれど、お父さんとらいはが死んだという事実から目を背けられなくなっ

てしまうからだ。

何も聞いていたくない。

目を閉じていけば、ずっと思い出の中で二人に会えるというのに、周りの人々は私を「可哀想な女の子」として現実引つ張り出して来る。それが善意だとしても。

今は人の声を煩わしく思う。

誰にも知覚されない、私だけの空間の隅で丸まっていたい——今ほど、そう熱望したこととはなかった。

だから、明後日の方向から来たその一言は、私の殻をいとも容易く破り去った。

「上杉君、君は私の家で預かることになった」

「……………え？」

「私と君のお父さんとは古い仲だね。その縁あつて、君を私の家に——」

「——あ、え——」

意味のある言葉を紡ぐ事ができない。

しかし理解はした。この男——顔を合わせるのは初めてだが——中野家の父、中野丸男が、私を引き取るのと決まったのだ。

感謝するべき、なのか？それとも、自分の家族はあの二人だと怒るべき？氷のような無表情からは、何を察することもできなかった。

結局、口を突いて出たのは疑問だった。

「……なんで、あなたが、そこまで？」

「――君の祖父母は経済的にはともかく、体力的に君を預かるのは厳しいものがあると判断した。彼等は持病持ちだ――そして、君の様子を見るに、下手に環境を変えるべきではないと判断し――」

「そうじゃ、なくて。どうしてあなたが、そこまでするんです――？」

「――病院に運び込まれた段階で既に難しい状態であったものの、私達の力不足という面も否めない――せめて、君にできるだけのことをしてあげたい」

「――――」

途端に、目の前の男が憎らしく思えた。

力不足？そんな言葉で、彼等の死を片付けるつもりか。医療の限界などという言い訳で、彼等を救えなかった免罪符にでもするつもりか。

ふざけるな――

そう言い放つてしまえば、心はまだ軽くなったのだろう。

だが、この男の氷のような無表情が、ほんのかすかに溶けて、雫となっているのが付いて――その言葉を引っ込めた。

その潤んだ瞳を、私は憎んでも――憎みきることはできなかった。

心に相反する想いが入り混じったまま、その日はやってきた。

あるだけの荷物をボストンバッグと車に詰め込んで、私は中野家にやってきた。

## 三話

世界に置いていかれたような感覚。

みんなは脇目も振らず歩いていくけれど、私一人だけが変われずに、その場で足踏みをしていた。

それでいいと思っていた。私はいつか役に立つ人間になればそれでいい。勉強さえしていけば、いつだって私は前に進めるはずだって。

だけど、私は過去からやってくる鎖に絡め取られて、身動きが取れなくなってしまうていた。暗いのは怖い。不確定な未来は何が起こるか分からない。だから、目を向けていたくない。

過去に縛られ。

未来を恐れて。

私はただ、放棄という名の停滞を繰り返しているだけだった。

「上、——上杉——」

不意に声がした。

今はそれすらも煩わしい。目を開けてしまえば、現実を見なくてはいけなくなる。

夢想到逃避してしまえば、あとは楽だ。何も考えずに揺られているだけでいい――

「――上杉」

「…………ツ」

ぱつちりとした瞼。輪郭のある鼻。同性から見ても魅力的な顔立ち。

何度も見た顔がすぐ近くにあった。

しかし、この子達に限っては――何度、顔を見ようとも、顔だけでは誰かが分からな  
い。少し離れて見ると、腰まで伸びたロングヘアと、頭についた黒い蝶のリボンが目  
に入る。――二乃だ。

中野家の五つ子は、こういう小物でしか判別がつかない。――至極面倒くさい。そし  
てこの苛立った口調から推察するに、おそらくまた面倒な事になりそうな気配。

「――何度も呼びかけたんだから、すぐ起きなさいよ」

「……………ん」

「まあ、いいわ。今からご飯作るけど、何か食べたい物とかある？」

「……………別に、ない」

「あつそ。じゃあこつちで適当に作つとくから、荷物運んでくれた四葉に礼でも言つて  
おく」と。いいい？」

「……………」

首を微かに動かす事で返事した。

二乃が溜め息をついてキッチンに向かうのを見ると、伸びをして――身体が動かない事に気がついた。

ソファに沈み込んだお尻が離れない。長いことここに座っていたからだ。

(――寝すぎた。疲れてたんだ……人の家で寝るなんて、私ったら……いや、もう私の家なんだっけ)

夜の空に散りばめられた星を見て、もう夜なのかと呆けた頭は認識した。星を数えている内に、意識は覚醒していく。やらなければならぬ事が沢山ある。年金や保険証などの手続きにも行かなければならないし、定期テストも受けていないので追試に向けて勉強せねばならない。優秀な成績、かつ止むに止まれぬ事情ということで、ほぼほぼ形だけのテストだと言われたけれど。

――明日からでもいいか。

「家庭教師、どうするの」

「んー……？」

「パパがね、あんたを引き取る時に言ったの。家庭教師の仕事は強制しない、つて。もし辛いようなら辞めてもいいし、それであんたを追い出すような事はしないって」

(……………)



「あんたが休む、ないし辞めるんならその時は別の家庭教師をつけるって言った。……だから、結局はあんたが続けたいかどうか、ってわけ」

随分と良い条件だ。

寧ろ、ここまで良くしてもらっていいのだろうか。彼の鉄仮面の下に詰まっていたのは意外にも優しさだった。

……バツが悪い。勝手に恨んで、勝手に感謝して、自分の子供っぷりにほとほと呆れ返る。しかし、素直にその優しさを全て受け入れるほど、単純な子供でもなかったが。

自分は捻くれたガキだ。

中野丸男にここまで良くしてもらっても、どうしてもあの男が純粹な善意ではなく……贖罪のために奔走する咎人のように思えてしまう。

(同族嫌悪、かな。罪といえば、私も……)

「じゃあ伝えたから。……あとね、上杉」

「何?」

「問題集、役に立ったわ。あれのおかげで前より良い結果が出せた。全教科赤点回避とはいかなかったけれど。……ありがとう。私達への迷惑とか、気にしなくていいからね」

「……………」

しばらくの間、その言葉をただの音としか捉えられていなかった。それを意味として理解したのは、もうしばらくしてからだった。

ごちやごちや考えるのが面倒臭くなって、自分に充てがわれた部屋に入っていく。もともと大して物を持っていなかったもので、中は簡素なものだ。

（「ずつと欲しかった個室。私だけの、どれだけ散らかしても、どれだけ汚しても誰も文句を言わない個室」）

皮肉なものだ。

家族を失った代わりに孤独を手に入れた。

いくらお金を貰おうとも、いくら良い生活をしようとも、満たされることは無い。

心の穴だけは塞がりはしない。

死体安置所に行った時、既に父親と妹は死体として扱われていた。

青白い皮膚が恐ろしく冷たかったのをよく覚えている。あちら側とこちら側に存在する、どうしようもない隔たりに気付いてしまったのだ。

ただそれだけだ。

死んだ人は生き返らない。その事実を突きつけられた瞬間、これでもかと心が抉られ、大きな風穴が開いてしまった。

この穴は、未だ埋まらず。

## 四話

ノックの音がした。

面倒だったので無視していると、おそろおそろと言った風にドアが開いた。

二人の来訪者は、遠慮がちに入室した。

「――三玖と五月だ。

「し、失礼します」

「一週間ぶり、カゼハ」

「――……」

ああ、またこの目だ。

葬式でうんざりするほど感じた、私を哀れむような――同情するかのような目。

その瞳には、いつだつて『家族を喪くした可哀想な女の子』が写っているんだ。私をそんな風に写すくらいなら、いつそのこと視界に入れなくてほしい。無視してほしい。見ないでほしい。

哀れみも同情もいらぬ。そんなものがあつたところで、私の家族が戻ってくる訳じゃないんだから。

「何か、——用？」

拒絶の色を出さないよう注意して言ったつもりだったけど、どうやら私の声は予想以上に冷たかったらしい。二人は一瞬身体を震わせた。そんなつもりは毛頭なかったのだが……。

微妙な顔をする二人に、ぎこちない笑みを浮かべた。

「何か用事でも？」

「あー……ええと……用、というほどの事でもありませんが」

「カゼハ、何か欲しいものない？」

「欲しい——いや、特には——」

「食べたいものとか、行きたいとことか。私達に言ってくれば、できる範囲の事なら何でもするよ」

「——私も三玖も、貴方の力になりたいのです。私達だけじゃない、一花や四葉、二乃だって……きつとあなたを支えてくれますよ。私達は貴方の味方です」

「………そつか。でも、本当に今欲しいものはないよ」

半分本当で半分嘘だ。

欲しいものは一つだけある。しかしそれは二度と手に入れられる事のできないもの。

もしもここで、父親とらいはをここに持って来いと言われたら……二人はどういう反

応をするのだろうか？

困るだろうか？それとも面倒臭い女だと幻滅するかもしれない。

三玖と五月の顔を見た。

純粹な優しい目だ。力になりたいというのは本当だろう。二人の死に悲しんでくれているのだろう。

平時であれば、その優しさに癒されていたのだろうか……、今だけはその目を向けてほしくない。薬というより、毒だ。

（――最低だ、私。こんなにも優しい人達に、話しかけないでほしいって思ってる）

三玖も五月も、中野家の五つ子は皆んな、死んでいった二人のために心を痛めてくれるような優しい人たち。一人取り残された私のことを案じてくれているような慈しみを持った人たち。

その人達の『眼』が――自分の心を、少しずつ、少しずつではあるが――蝕んでいく。その眼差しは、否応にも二人の死と対面せざるを得なくなるから。

「――ありがとう、二人とも」

取り繕った笑顔しか浮かばなかった。



夕食で何を話したか良く覚えていない。

美味しい、とか、明日のメニューはどうするだとか。そんなくだらない話しかして  
なかつた気がする。

だというのに、たったそれだけの会話で、心が磨耗されていく。言葉の端々から気  
遣つてくれているのだと感じる。身体中の細胞という細胞から遅効性の毒がゆつくり  
ゆつくりと回つていくかのような気味の悪さに、頭がズキズキと痛み出す。

はあ、とため息をついた。

今日はさんざん寝た。

考えたくなくて、寝た。

だからかー寝疲れた。ベッドで単語帳を広げてみても、内容に集中できない。

何故こんな目に遭わないといけないのか、とかそういう考えばかりが頭に浮かんで新  
しい情報を阻害していた。

(……………喉、乾いたな)

身体は喉の渴きを執拗に訴えていた。その要望に応えてやることにする。

ベッドの上から動くのすら倦怠を覚えたが、無理矢理立ち上がると、一階へと降りて  
いく。

暗い中でも光る水槽が幻想的だ。

最上階ともなると、隣人の声に頭を悩ませる心配もないというわけだ。思わず、自分も静かにならなければ、と錯覚するほどの静寂があった。

この世にたった一人でいるような感覚……その中に紛れ込むほんの少しの寂しさ。その心地良さに浸っていたかった。

しかし、そこに一人……、乱入者が現れた。

「どうしたの、カゼハちゃん」

「……眠れなくて」

「そっか。じゃあ一花お姉さんとお話でもしない？」

彼女を見て、思わず笑顔を貼り付けた。

## 五話

「こつちおいで、カゼハちゃん」

「……………ん」

不思議な感覚だった。

一花にはー私に対して憐れみだとか、同情だとかの感情が一切ないように思えた。

いや、あるのかもしれない。

だがそれを悟らせないー笑顔という名の無表情。怒っているのか、憐れんでいるのかさえも分からない、ただただ笑顔の仮面がそこにはあった。長女として、女優としてなせる技だろうか。

だからか、私は今までの人達のように心を閉ざす事はなかった。

「三玖と五月ちゃんから聞いたよ。すつごく落ち込んでるんだってー？」

「……………、まあ、うん」

「ごめんね。あの子達も悪気があったわけじゃないんだ。家族がいなくなる辛さを、私達はよく知ってるからさ」

「……………え？」



「私達、お母さんいないんだ。五年前に病気で死んじゃって。それで今のお父さんに引き取られてきてね……。五月ちゃんなんか特にお母さんの事大好きだったからさ、気持ちに分かる……。とまではいかなければ、放つて置けなかつたんだと思う。三玖は別の事情があるみたいだね」

ひたすらに驚いていた。

この子達は自分と同じだ。五年前、同じく苦しんで……。そして、今がある。

強い子達だと思ふ。

できないのはただただ勉強と経験だけ。一花の横顔が、酷く大人びていて……。それでいて、悲しみ疲れた顔に見えた。それを見て――「どうやって乗り越えたの」という言葉を口の中で転がした。

（一花は……。乗り越えたんじゃない。乗り越えざるを得なかつたんだ。大切な姉妹のため……。）

自分には、ない。

大切なものなどもう残っていない。

私には何が――

「私達――『私』が、君の大切な存在になりたいんだ」

「え？」

言っている事に理解が追いつかなかつた。

「辛さを、悲しみを、苦しさを、いつか皆んなで六等分できるように――まず、私と君とで共有したい。だって、ほら、辛い時は泣くものでしょう。なのに君は泣くのを我慢してするように見えるから」

「――悲しみを共有？無理だよ……しよせん、貴方は私ではないもの」  
「できるよ。私達ができただもの」

それは他人同士ではなく、五つ子だからできた事だ、と反論しようとした。

その前に顔を引つ張られた。痛い。

「嘘でしょ、その表情」

「――」

「君、人に作り笑いをやめろって言う割には自分もする人だったんだね？ずるいよ。辛いならもつと辛い顔しなよ。――私達は今日から――家族も同然、なんだよ？」

「――」

「自分の大切な人が、我慢してるのを見るのは、辛いよ」

頬に流れた熱い雫。

それを見て、ああ、泣いているのだとなんとなく思った。早く止めないと、とも。

だけど一花の顔を見ると、涙の勢いは増すばかり。自分が建てた防壁が崩れていくの

を感じていた。

そして、目を背け続けてきた痛みが、今になって放出される。強がりには壊れて弱味が見えてしまう。彼女はそれでいい、と言ってくれた。

悲しい。辛い。

苦しい。

――寂しい。

この世界に置いていかれたような疎外感を思い出していた。

一人は辛い。

今まで自分が抱えてきたものを、負ってきたものを、全て出した。

一花の前でみっともなく泣きながら――

「一花、私、どうしたらいいの……?」



生きてきた中で初めての感覚だった。特定の誰かに向けるこの想いも――そして、この子のこんな姿を見て、言いようもない情慾が湧いた。

一度会ったきりだが、らいはちやんが死んだと聞いた時は信じられなかったし、とても悲しかった。同時に、カゼハちゃんのお父さんも死んだと聞いて、彼女は大丈夫だろうか……と、心配に思った。

案の定、彼女は側から見ても分かる程に弱り切っていた。捻くれていたけれど、とても優しくあったあの頃の彼女はいなかった。

そこにいたのは、家族を失い、家を失い、――まるで泣きそうな子供のような――少女がいた。彼女が、こんな心細い顔をするなんて、と。

彼女を心配すると同時に、鬨りを帯びつつも、とても幼い顔に心が揺れ動いた。ぞくり、と。

顔に出すまいと……抑えようと思っていたのに、顔に三日月が浮かんでしまう。

胸の内に広がる高揚感。

溢れ出る独占欲。

今、自分の腕の中で泣いているこの少女を見て――ああ、どうしようもなく好きなのだ。だと自覚する。

自分だけのものになりたい。

カゼハちゃんの家族が死んだことに悲しんだのは事実だ。カゼハちゃん本人を心配したのも事実。

しかし、カゼハちゃんを自分のものにできると思わなかったわけでもなかった。欲しい。

この子が欲しい。

「一花、私、どうすればいいの……？」

鼓動が早くなった。

「何もなくていい。辛いことがあったら全部話してくれれば、それでいい。

——お姉ちゃんが守ってあげる」

## 六話

ブランコの鎖が軋んだ。

夜の公園へ、風が冷たい空気を運んできていた。

漕ぐ度に、心が締め付けられるような錯覚に陥って――そして、気付けば動けなくなっていた。

「上杉ちゃん」

それは私が彼女――上杉風波に対して使っていた言葉だった。

あの日以来、彼女は彼女でなくなった。

今まで自分を形成してきたモノ――自分がここにいるための錘。それを失った彼女は、どうすればいいか分からなくなつて、ただただその場を漂っている。

私の立場に置き換えれば、その気持ちはよく分かる。今まで作り上げてきたモノが何の意味もないと否定された絶望。そしていつしか、人に嘘はつけないので自分に嘘をつくようになり、偽りの自分を演じるようになって。

あのままでは欺瞞と怠惰に満ちた、悲しみに暮れた女性になってしまう。自分と同類になつてしまう……それは嫌だった。

だから彼女に対して、色々なことをした。  
声をかけたし、慰めもした。

だけれど彼女の顔は変わらない。

『ありがとう、四葉。気持ちは嬉しいよ』

私では、あの仮面を引っぱがす事は出来なかった。いずれ本来の上杉ちゃんの顔は、偽りの仮面と同化してー、そして剥がれなくなってしまう。

あの笑顔をもう一度見たい。

このブランコで一緒に笑いあった、あの子供のような、無邪気な、満面の笑顔を。  
上杉ちゃんは闇に吞まれてしまう。

誰しもが抱えているソレは、生きていく内に心を蝕んでいく。きつとそれが多いか少ないかだけなのだ。

確実にー、彼女にはそれが巣食っていた。

どうしようもないほどにー、それは彼女の一部と化していた。  
いずれは彼女自身にー。

(私じゃ救えない)

私は、彼女にいらぬ世話を焼くばかりで何の支えにもなれていなかった。寄りかかってもらっていなかったのだ。

人が人を頼る理由は一つだけ。その人が頼れる人物であるかどうかだ。私は違うー。

そもそもその前提として、人は人を助ける事ができない。誰かに頼って、初めて人は救われる。

私は助ける側に立ちたかった。

救われたから、救いたかったのに。

だけど……上杉ちゃんは、心を閉ざしたままなのだ。今までの人生の中に、彼女を救うための答えは存在しなかった。

私はー何なんだろう。

あの人にとって、どんな存在なんだろう。

頼ってくれない。その事実が、言い知れぬ無力感となって私の胸を締め付けた。

自分には何もできないー。

彼女のためにできる事は、何一つ。

▽▽▽▽▽▽

「自分の大切な人が、我慢してるのを見るのは、辛いよ」



重い足取りで家に帰って、万が一誰かを起こしてはまずい、とー音を立てずに動いていたからか。その二人は、私に気付いていなかった。

「二花、私、どうすればいいの……？」

上杉ちゃんは、弱り切ったーそれだけで、年相応の、いやそれ以上に幼い……子供のような泣き顔をしていた。

ー鼓動が早くなった。

それ以上はやめて、と口は動いていた。

言わないで、と。

「何もなくていい。辛いことがあったら全部話してくれば、それでいい。

ーお姉ちゃんが守ってあげる」

その言葉が口火となり、彼女は、一花の胸の中に飛び込んでわんわん泣いた。

一花が優しく背中を叩いてるのを見て、強烈なほどの焦燥感が襲った。

私がーそこに座っていたかったー

ーいや、違う。

そう思うべきではないのだ。

私は喜ぶべきだ。上杉風波が、自らの殻を破ったことに。悲しみをきちんと認識出来

たことに。

上杉風波の辛さを分かち合うのは、誰だつていいー。そうして、自分の気持ちに蓋をして、何も感じないようにした。

（「ー『風波ちゃん』が救われるならー。それで良いー。それでー。…」）

「……私が悪いの」

「うん？」

「あの二人が死んだのは、私のせいなの」

え、と小さく息が漏れた。

彼女が吐露した感情に、動けなくなつてしまつていた。

「どっかの誰かに教えて貰つただけ……あの日……二人は、私へのプレゼントを買いに行つてたんだ。少し遅いけれど、勤労感謝の日の贈り物を……。私の家、貧乏だから、ここのお給金は家計の足しになってたんだ。だけど……二人は買い物に帰りに、二人が車に撥ねられて。私が、あの日、何も要らないつて言つていれば未来は変わつてた」

懺悔をするかの如くだった。

自責の念に駆られてー、抜け出せなくなつてしまつていた。

「……カゼハちゃんが悪くないよ。悪いのは車を運転してた人だよ」

そう言うのは簡単だ。

実際に彼女は悪くない。法律上も、倫理上も彼女は決して罪を犯していない。

だがー違うのだ。

「……………そうかな？ 本当に悪くないって言えるのかな。……………血のついた紙袋を見てからさ、ずっと二人に責められてるような感覚に陥るんだ。そんな人達じゃないのに、私は直接関係ないのに、なの……罪悪感だけが心を満たしてる」

くだらない悩みと一笑に付す事ができないでいる。悪くないと分かっている。割る切れないものは必ず存在する。

私がそうだったようにー。

私も一花も分かっていたいなかった。

彼女は悲しみから逃れようとして、空虚でいようとしていたのではない。

考えたくなかったのだ。

自分のせいだ、と。

二人の死と対面して、自分の責任に耐えられなかったからだ。

向き合いたくなかったー。

「私が悪くないなら、なんで罪悪感が湧くのかな？ なんで私は二人が怖いのかなあ？ どうして……………どうして、悲しいだけじゃないの？ 辛いだけじゃないの？ どうしてこんなに後悔しているの？ 一花、わたし、わたし。どうすればいいのかなあ。こわいよ……………くるしいよ……………」

駄々っ子のように彼女は問うた。

震えていた。

そこで漸く――押し潰されそうな彼女の心理の一端を掬い取った。

だけど、それだけだ。その苦しみは、受け止めきれはしなかった。

手の隙間から溢れていく。消えていく。

だけど、一花は、違った。

「……………貴方がどれだけの苦しみを抱えていたとしても、私なら、きつと分かち合う

事ができる」

「……………」

「貴方は……………大切な人、だから」

「……………え？」

「一生一緒にいよう？何があっても……………どんな辛い目にあっても、私が守るよ。お金も払う。貴方が欲しいものは何でも買ってあげる。いつそのこと、二人だけの家を買って、そこで一緒に暮らそう？」

「……………この世の凡ゆる苦しみから、貴方を解放してあげたい」

「どういふこと…………？」

「私は……………カゼハちゃんが……………」

わざとらしく音を立てた。

それ以上は、言つて欲しくなかつた。

聞きたくなかつた。

いずれは——私じゃない誰かと、そうなるのかもしれないのに。

その度胸はなかつた。

「四葉、帰つて来てたんだ」

「うん。ごめんね、遅くまで出歩いて。二人で何を話してたの？」

「あはは、ちよつとねー。カゼハちゃん、さっきのは……『皆んなにとつて』それくらい貴方が大きな存在つてことだから」

「?…うん……」

「さ、二人とも。今日はもう寝よう?」

泣き疲れたのか——上杉風波は、その日は泥のように眠つた。

私は、ただ思考の渦に逃避しているだけだつた。

考えたく、なかつた。

## 七話

中野丸男の登場は突然だった。

二乃が料理をしだす夕方頃に、ふと、静けさを身に纏ってやってきた。

姉妹達が顔を上げる。

「あれ？帰ってくるなんて珍しいーでもないか。最近は多いもんね」

「ああー少し、用事があってね」

彼の視線を感じて、用事とは私にあるのだろうと察する。

自分の部屋ー何もない部屋に彼を招き入れると、少しばかりの沈黙が流れる。彼の家であるはずなのに、営業先にやってくるサラリーマンのような可笑しいな空気が漂っていた。

「ー調子はどうだい」

「御心配おかけしました。家庭教師の仕事は続けられます。少しずつですが、あの子達の勉強も再開していています」

「それは結構。だが私が聞きたいのは君自身の事についてだ」

「……………」

「五月君から聞いたが、イー突発的に睡眠する事が多いそうだね。医学的な観点から言わせてもらおうと、それは過分なストレスが要因なのではないかと推測できる」

「……精神的ストレスサー、ですよね。対人関係で生じる、心身にストレス反応が出ている状態のこと……」

「よく勉強しているね。そしてそのストレスを感じると睡眠抑制ホルモンが働き、寝付きが悪くなったり、夜に寝れなくなってしまう事が増える。自覚はあるかい」

「……………ええ、まあ」

単純な話、夜に寝れない分、昼に寝るといっただけだ。

この間の一花や四葉の一件といい、自分でも夜に出歩く事が増えていると思う。

だが、イーその度に、得も言われぬ窮屈さを感じるようになった。ここは三十階の高層マンションの天辺だ。景色もよく、生活環境に不便はない、が、イーあまりにも外界とかけ離れすぎている。

この窓から下を見下ろす度に、ここが鳥籠のように思えて仕方がなかった。

「ここをイー君の家だと思ってくれて構わない。と言つても、直ぐには無理かもしれないが、イーここは君達を守る為の家であつて、既に家庭教師の仕事場ではない。居心地の良さは、保証する」

「……ええ、ありがとうございます」

二人の歯車は、どこか空回っていた。

お互いに回り続けて――しかし嘯み合ってはいなかった。

▽▽▽▽▽▽▽

無言で家を出ようとする父の背中を見つけると、二乃は咄嗟にその影を追いかけた。

「待つて。もう行くの?」

「――仕事があるんだ」

言葉の中に感じる、出来合いの――作り物のような違和感。確証はないが、それが真実であるとは思えなかった。

「ねえ、パパ。――なんで最近、家に帰って来るようになったの?それに急に上杉を引き取るだなんて、そんな――」

――パパらしくない。

その言葉を喉元に抑えた。――思い出したからだ。彼の事を何も知らない事に。

「――彼女の父親とは、実は昔から交流があつてね。彼が死んだ時、自分に近い者がいなくなる恐怖を思い出したんだ。――君達もふと、いなくなってしまうかも、と」

「――」



「上杉君を引き取ったのも、彼へのーなんていうか、情、と言うべきかなーそういうったようなものがあつたからだ」

「パパ……………」

彼の一端に触れた。

それはとても深く、穏やかなものだった。

未知は既知へと変わる。

「独りよがりなのかもしれない、がねー私がいると、君達の居場所を壊してしまつていくような気分になるー」

「壊す、というなら。もうとっくに私達の世界は壊れているわ。家庭教師を雇うつて決まった時点で私達の生活は変わらざるを得なくなつてしまつた。あの子がこの家に住み始めて、その変化はより大きい物になつたわ」

「……………」

「私達の世界はいつも動いてる。だから、私達自身も変わらなきやいけないーそうでしようっ」

「……………そうだね。では、私はこれで」

行く。行つてしまふ。

父親は父親らしくなく、どこまでも、一人の孤独な男だった。

彼も、またー。

「晩ごはん。食べて行かないの」

自分の口から出たとは思えない発言。以前なら言う事は絶対に無かつたであろう言葉に驚いたのは、他ならぬ自分自身だ。

彼女の父親は少しばかり目を開いてー

「いきなり食事はハードルが高い」

「……………」

へタレた。

## 八話

制服が重たい。

部屋に閉じこもってばかりで、不規則な生活をしてきたから、当然といえば当然なのだが、体力が落ちているようだ。

硬くなった身体を伸ばして、覚束ない足取りで階段を降りる。

「おはよう」

「おはようございます、上杉さん」

幸い、表情筋はまだ生きていたらしい。口元に僅かな感触を感じると、二乃が作ってくれている朝食に手を伸ばす。

髪が目元まで伸びている。

鬱陶しい。いつそのこと切ってしまうかとも思ったが、隈を隠してくれるのなら逆にあるがたい。

睡眠時間はともかくとして、睡眠の質は確実に落ちている。

(どうせいつか老いて皺くちゃになつて死ぬとはいえ……せめて人として最低限の身嗜みは整えておかなきゃ……)

鏡で見たところ、若干ではあるが肌が荒れていた。二乃に言われて毎日風呂に入っていたし、櫛も入れていたのでそれほど酷くはなっていなかったが、やはりまとまった睡眠を取れていないというのは大きい。

「さっさと支度をして学校の準備をしなくては。」

そう自分に言い聞かせると、ポケットにハンカチを入れる。その時に硬い紙の感触。取り出してみると単語帳だった。

(そういえば、最近見ないと思つたら、こんなところに入ってたんだー)

そういえば、これを開くのも億劫になっていたのであった。たつた数週間しか経っていないというのに懐かしさすら覚える。何となく、何の気なしにそれを開いてみた。

「……ッ」

「カゼハ? どうしたの、早くしないと学校始まつちゃうよ」

「……うん。今行くよ、三玖」

▽▽▽▽▽▽

「上杉さん、ちよつといいかしら」

始業式も終わり、さっさと帰ろうとしたところを担任が呼び止めた。

彼女について行き職員室ーではなく、進路相談室に来ると、お茶を勧められた。俄かに緊張が走り、強張るが、何とか外に出ないよう努める。渡されたのは、葬儀やらでバタバタしていた時期に受けられなかったテストーその追試の結果だ。結果は聞いていたが、実際に目の当たりにすると少しばかり辟易とした。

国数英理社の五教科。

私はいつも満点だった、けれどー。

「今回のテスト、平均56点。どれも格段に成績が落ちてますね」

「……………すいません」

「ああいや、出来ない事を責めているのではありませんよ。それを教えるのが教師ですから。……………貴方はとても真面目な子ですから、手を抜いていた訳ではないのは分かります。事実、きちんと最後まで解答していますからね」

「……………」

「ーやはり、環境が大きく変わった事はー負担ですか」

「……………」

本題はそれか。

勉強が出来なくなった私を心配してくれているのか。

捻くれた捉え方をするなら、自分の教師としての点数稼ぎに奔走しているといったと

ころか。悪いとは思わない。自分も五つ子の点数稼ぎを重視していた。

さらに捻くれた捉え方をするなら、地味で陰鬱な女でも勉強だけは出来たから容認していたものの、ついで得意の勉強すら出来なくなってしまうから、周囲に害を与える前にどうぞどこかへ転校なりなんなりしてください……というところか。

まあ、どうでも良いが。

「私に、全く負担がないーといえ、嘘になります」

「こは正直に話すことにした。」

「正直、あの時の事を思い出して辛い時は多いですしー、医者との知り合いにも、時間をかけて治していくしかない、と言われました」

「ーそう。これは、選択肢の一つなのだけどもね？」

「はい」

「貴方のー保護者の方にお話させていただいたのだけれど、転校という選択肢も視野に入れる必要があるかもしれない」

「はあ」

「過去の事例にもあったそうなのだけれどね？ 転校する事で人間関係を含む生活環境を大きく変える事によって精神的な負担を軽くするというー」

（その過去の事例が今の私に効くって、何でそう思うんだろう）

そもそも、親と妹が死んで中野家に引き取られて、生活環境が大きく変わって（自分を受け入れてくれたあの家には申し訳ないが）プレッシャーになっっているのだから、これ以上変えても悪化するだけでは？

人間関係にしたって、五つ子以外には友達と呼べるような存在もない。よつてこれから変わるといふ事もないのに、それを分かかって言っているのだとしたら……よほど厄介払いしたいか、ズレているのかのどつちかだ。

（けど、まあ。良いかもしれない。中野さんには迷惑かけるかもしれないけど、別にこの高校である理由はない。これで何かが変わるかもしれない。変わらないかもしれないけれど）

なら、私がこの高校に固執する理由は――

――『私はこの子達のパートナーだよ』

何故だか。

あの子達の顔が頭をよぎった。

私が高校を変えたら、あの子達について来てくれるだろうか。もう一度あの子達と同じ学校で過ごせるだろうか。

きつと無理だ。

いくら私の成績が落ち目で、あの子達も点数が上がって差が縮まったとはいえ、今までの成績を加味するなら。彼女達とはレベルの違うところに通う事になる。追いかけてきてくれる理由もない。

一緒に卒業ができない。

それにーそんなことに。ほんの少しの、僅かな寂しさを感じるのは何故だろう。

こんなくだらないことに執着する女だっただろうか、私は。

「私はーまだ、この学校にいたいです」

最近気付いたが、私の口はよく動く。よほど良い油が乗っているらしい。

「妄執と思われるかもしれませんがーこれ以上何かを変わるのなら、私はもう世界に着いて行く事ができません」

そうまでして何故、私は五つ子に拘る？

友情、というやつか。彼女達との間に絆を感じているという事なのか。

それとも少し違うような気がするが……。

ー愛？いや、依存？

いや、そんな訳がない。

愛なんて欲しくない。そんな物を持つから失った時の虚脱感が大きいのだ。人はい



ずれ死ぬのだ。それまでの過程で何をしようが関係ない。

だから、これは、ただ。

置いてけぼりにされたくないだけなのだ。

## 九話

カゼハの事が心配。

その気持ちは皆んな同じだろう。きつく当たっていた二乃でさえ、彼女への態度があまり得ない程に軟化した。

家族を失った時の自分達と重ねているのかもしれない。

かくいう私も、カゼハの最近の憔悴ぶりを見て――首を真絹で撫でられたような感覚に陥った。

少しずつ――ではあるが、取り返しのつかない未来へと進んでいるような怖い。

カゼハが、ではない。カゼハが自ら破滅の道を選んで歩いているようで……それがただ恐ろしい。何度声をかけても、止まってくれやしない。

（本人は自覚していないだろうけど――、あの日以降、カゼハは勉強そのものを嫌悪している節がある）

私達に教えてくれている時には、流石に顔には出さないけれど。少なくとも以前のよ

うに、暇を見つければ勉強……などといった病的なまでの勉強狂いではなくなつた。そもそも、彼女が自学をしている際、苦しい顔を浮かべてペン先を震わせているのを見て異常だと思わないわけがない。

勉強そのものに対する拒否感……いや、忌避感すら感じるほどの拒絶。  
極め付けは、始業式の朝だ。

洗面台の前から動かない彼女を見て、何の気なしに声をかけた。

「カゼハ？ どうしたの、早くしないと学校始まっちゃうよ」

「……うん。今行くよ、三玖」

思わず息を呑んだ。

そう言って振り向いた彼女の顔は……とても青ざめていて、苦悶に満ちていたのだ。  
顔色が悪い。

目が泳いでいる。

汗がひどい。

身体は小刻みに痙攣し、足取りはふらふらとして覚束ない。

医療の知識がない私でも、その様子が尋常ではない事が見て分かった。

「カ、カゼハ、大丈夫なの？」

「なにが？」

「なにが、つてー」

「さあ、学校行くよ」

「でもー、……え？」

洗面所を出た瞬間、様子が一変した。

「先程までの悲痛な様子はなりを潜め、いつものー小生意気なカゼハが戻ってきた。見間違いだっただろうか？」

あまりにも……胸の痛くなる、残酷な見間違いもあったものだ。

すぐそばに単語帳が落ちていた。

まさかとは、思うが。

カゼハは勉強すること自体に、恐怖を感じてしまったのかもしれない。

（……だとすれば、今のカゼハを助けられるの私だけ。新しい家庭教師を雇う事になるだろうし、少し寂しいけれど）

カゼハには、一旦家庭教師をお休みしてもらおう。

だいじょうぶ。少し休んで、勉強に前向きないつものカゼハに戻ったら、また家庭教師をやってもらえればいいだけ。

その間は、私達がサポートしてあげればいいんだ。彼女の助けになるように。

（お父さんに相談しよう。カゼハがお休みできるように、つて）

▽▽▽▽▽▽

「少し来てくれるかな」

中野丸男はいつもの無機質な声で言った。

胸の中に嫌な予感を抱えて行つたが、それは当たり前だった。彼は無情に言い放つた。

「君の家庭教師の任を解く」

「……」

「君には酷な話かもしれないが——君の学力が落ちた以上、もう家庭教師を続けることは出来ない、判断させてもらったよ」

「……そう、ですよね」

「だが、君の学力が上がり——そして、君にその意思があれば、再び家庭教師として雇う事もやぶさかではない。だから、そうだな——、少しの間休むと考えればいい」

「……………結局は同じ事だ」

休むのも辞めるのも、本質的には変わらない。学力が戻つたところで、時すでに遅しだ。

この人が雇うのはプロの家庭教師だろう。

とすれば、私よりも教え方が数段上手なわけで、私があの子達に必要とされなくなる可能性もあるわけだ。

だが、親としては当然だ。

私がどんな事情を抱えていようと、どんな境遇にあらうと、家庭教師としては使えない物にならない、という事だ。

こんな事を言われるだろうと、ある程度の想定はしていた。だが、実際に言われると、受け入れ難いものがあつた。

ああ、あの時と同じだ。

担任から転校するべきではと持ちかけられた時、私はあの子達の事を考えた。私が転校すれば、あの子達と会える時間が減ってしまう。

今まで培ってきたものが、崩れてしまう。

それだけは嫌だ。新しい環境になっても、私はきつと適応できやしない。だから変えない。

不変でなければならぬ。

この関係性を壊してはならない。

「――」

「まだ、やれます」

喉元から言葉が勝手に出ていた。

驚く丸男をよそに、言葉は紡がれていく。

「先日の試験に関して、すみません。家庭教師としての職務を放棄して、結果、あの子達にも迷惑をかけてしまいました。ですがー私の学力が落ちたのは、休みに入る前の時の事です。まだ、やれます。やらせてください」

「……………」

相も変わらず、よく回る舌だと思う。

二人の葬式でやたらと私を心配する遺族の相手をしてから、こういった建前を並べるのだけは上手くなった。

くだらない事ばかり、上手くなっていく。

だがー今回はそれでいい。

彼は目を細めた。

一人の親として娘達にちゃんとした家庭教師をつけてあげたい。しかし、私の境遇を考えればー中野丸男は、上杉風波を無碍にするわけにはいかないだろう。

彼の良心につけ込んだやり口。

だが、これが私にとつての最善手だった。

「……………いいだろう。では、条件を二つ設けよう」

「二つ?」

「二つ、次の試験で五つ子全員が赤点を回避すること。そしてもう一つ、君が再び学年一位の座を勝ち取ること」

「……………それは……………」

「厳しいかい?だが、仕事に関しては僕は対等でいたいと思つている。……………もつとも少しの間ゆつくり休んで、再び復帰するのが最善だと思つがね」

「いえ、できます。やらせてください」

「……………ああは言つたが、無理はしないでいい。それで身体を壊しては元も子もないし、仮に君が条件を達成できなくても誰も責めやしないよ」

「お心遣い感謝します。……………失礼します」

さてーどうしたものか。

もしこの試験で私がしくじつたら全てが終わつてしまう。

あの子達のそばにいられなくなる。

もうこれ以上、私の生活を変えてはいけない。変わるといふ事は、失う事だから。

過去は忘れちゃいけない。

手放しちゃいけない。

苛立ちのままに頭を掻き筆つた。何か手を考えなければならぬ。



目下の問題は二乃だ。

態度が軟化したとはいえーあの子が素直に勉強会に参加するとは思えない。  
何かー何か、ないか。

(……………あ)

ふと目に入る。

自分の黒い髪の毛。

ー電流が走った。そうだ。

この手を使えばきつとー。

でもこんな事したらー。

いや、なんだろうと構わない。

「二乃」

「なによ？」

「前に言ってたよね。私の従姉妹とたまたま会った、って」

「ああ、カナハちゃんね。それがどうしたのよ？」

「……………あの子がもう一度会いたいって」

——何だって、利用してやる。

## 十話

金髪のウィッグを着けて、二乃が指定したホテルに向かう。

ホテルの中で着替えようかとも思ったが、彼女に見られる可能性があるので除外。不確定要素は全て潰しておくかなければ。

私は、今日、二乃を騙す。

架空の人物——金波として二乃と接して、この子の蟠りを解く。そして風波に協力してもらおうよう働きかける。

杜撰な計画だが、私には勝算があった。

それは——二乃が金波に対して、恋心を抱いているということ。

二乃のその熱くときめく心を——もしも利用できたなら、これ以上ない必殺の切り札になり得る。

私はしくじる訳にはいかない。

私が私であるために。

変わらずにいるために。

そのためなら、私は不思議と——何だつてできるような気になるんだ。

なのに、どうして。

あなたは気付いてしまうの。

一緒にシークリームを食べようとした辺りで、二乃がはたと手を止めて私に覆い被さった。柔らかいソファの上に倒される。

二乃の凛々しい顔がすくそばにあった。

直視できない。

見れない。

「……………やっぱりあんただだったのね」

「……………いつ、から？」

「ついさっき、よ」

すると滑り落ちるウィッグの感触を肌を感じながら、こみ上げる怒りを抑えているであろう二乃の視線を浴びる。

あるのはーひとえに焦りと恐怖。

どうして。

どこで気付いた？私が時を巻き戻せるのならすぐにでも。そう願わざるを得ないほどの後悔が、ドツと汗と一緒に流れ出る。

そうだー私はこの部屋に入って、そしてお菓子を作って、そして食べるってなっ

そしてーああ、そこまではよかった。

『金波ちゃんさえいけばいいから』

『私も二乃だけがいればそれでいい』

「金波ちゃんはそのういう事を言うタイプの人間じゃないように思えた、それだけ」

「……それだけ？」

「それに、いつもの辛気臭い顔を見せられたら嫌でも気付くわ。……それで？」

「……………ッ」

「私、怒ってるんだけど。とても」

二乃の射抜くような瞳が私を差した。

苛立ち。

怒鳴るだとか、取り乱すだとかではない。淡々と事実を押し付けられている。

私のやった事の重さを見せつけられる。

罪悪感となって降りかかる、がーもう遅いのだ。何と愚かで、考えなしの行動だったのだろうか。

鳩尾から脳天まで、焦燥が駆け抜けていく。

私が口から言葉を発せないでいると、二乃がきつい口調で言った。

「何でこんな事したのよ？」

「……………ごめんなさい……………」

「私が欲しいのは謝罪じゃないわ。何でこんな事をしたのか、って聞いているの」

「……………わ、私……………二乃と……………仲直りしておかなきやと……………思っ……………」

「それだけじゃないでしょ？」

「……………に、二乃に……………勉強会に……………参加してもらいたく……………その」

「はあ？勉強会？それとどう繋がるのよ」

「か、金波で……………二乃を……………あー、説得できるかもしれないって思ったから……………」

辿々しい私の口調は、知らず知らずの内に二乃の怒りに火を注いでいた。

彼女は物事はハッキリするタイプだ。

ウジウジうだうだとしている私に、彼女は決して良い顔をしなかった。

「説得？そこまでして私を勉強会に引き入れたかったって訳？随分とまあ姑息な手段を使ってくれたじゃない。人の恋心につけ込んで」

「……………あ、」

「私をいくらでも利用できる安い女だとも思ったの？それとも甘い言葉をかければホイホイ言う事を聞く都合の良い人間だとも？ふざけないでよ」

「……………ごめん」

「……だからごめんじゃないってば！」

肩が跳ねた。

彼女の叫びに震えた。

しかし直後には、二乃に対しての申し訳ない気持ちが溢れんばかりだった。

私は。

人の心を利用した。

もしもここに呼んだのが二乃だったり、正体に気付いた二乃がさつきとこの場から去っていたりすれば、話は変わっていただろう。

だけどこのホテルには私が呼んだ。つまり二乃は期待して裏切られたし、そして今後もしも裏切った私と一緒に生活していかなくてはならないのだ。

そして何より私は女一。

思春期のこの時期に、同性愛に目覚め、そして失恋どころか恋を利用された彼女の心境はいかなるものであろうか。

「それで？ あんたはそうやってまで家庭教師の仕事をしたかったわけ？ そういえばそろそろ試験だもんね。またパパに何か言われたのかしら」

「私の成績が落ちたから……私がもう一回学年一位になって……全員の赤点回避しないと認めないって……」

「それはまた随分ときつい条件出されたわね。でも生活費諸々はパパが出しているんだ

し、家庭教師のバイトも辞めていいんじゃない？少なくとも私は、あんたに続けて欲しいなんて思っていないわ」

「……だって……私はみんなが好きで……もう二度と……この環境を崩したくなかったから……」

「……あんたにとっては何よりも良いかもしれないけれど。あんたは人の気持ちを考えなかつたわけ？私達五つ子のためとかならともかく、完全に自分のエゴで動いてたのよ、あんた」

「……うん」

「おかげで私は好きな人もなくすし、あんたに対しての信用もなくしたわ。――残念だったわね！」

半ば叫びつつ、二乃は立ち上がる。

私との茶番に付き合うのが馬鹿らしくなったのか、荷物を纏めている。

「……もういい、私帰る」

このまま帰してはいけない、のだが――。

しかし私には――それを追う資格も、度胸もなかった。

ああ。

こんな時まで、保身だなんて。



絞り出して、煮詰めて、ようやく私は言葉が出てきた。

「二乃ー、」

「二乃つて呼ぶな」

振りむかずに出て行つた。

おかげで顔は見れなかったがー彼女が軽蔑と失望を抱えていたのは、間違いないだろう。

呆然としたまま、一夜を過ごした。

カラカラになった身体でも、涙は出るらしい。激しい後悔と自責の念に押し潰されながら、ぼろぼろと、泣いた。

▽▽▽▽▽▽▽▽

ー時刻は少し巻き戻る。

三玖が父に相談する、ほんの少し前。

「それでねー、風波にはしばらくの間お休みしてもらおうと思って」

「彼女がそんなに思い詰めていたなんて…分かりました、私もそれに賛成です」

「……………うん、それがいい……………よね」

「？四葉？」

「……………ううん、何でもない、大丈夫。きっと上杉ちゃんもすぐ元気になってまた家庭教師を再開してくれるよね！」

「では、お父さんには私から……………」

「駄目だよ」

「……………え？一花？」

「カゼハちゃんやんが家庭教師から外れる、だなんて。駄目だよ。だって——あの子には私  
が——、私達が必要だもん」